漢文 読みの重要語 まる見え1枚シート

再読文字・置き字・返読文字・頻出訓読語 — 漢文を「読める形」に直す道具がこの1枚に全部そろっています。まずはここから。

★★★ 入試超頻出　★★ よく出る　★ 余裕があれば　💡 覚え方　▶ 例文

① 再読文字（2回読む） ▶ ② 置き字（読まない） ▶ ③ 返読文字（下から返る） ▶ ④ 頻出訓読語（読み方の決まり）

まず「2回読む字」「読まない字」「返って読む字」の3種を見分けられれば、白文が一気に読めるようになります。

読む順：左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ（見出しの番号が順番です）

1 再読文字 — 1字を2回読む

同じ字を、まず副詞として読み（上から）、もう一度動詞・助動詞として読みます（下から返って）。書き下しのとき2回目だけ平仮名にするのがルールです。

字	頻出	読み（型）	意味・訳し方
未	★★★	いまだ〜（せ）ず	まだ〜していない
将・且	★★★	まさに〜（せ）んとす	今にも〜しようとする・〜するつもりだ
当・応	★★★	まさに〜べし	当然〜すべきだ（当）／きっと〜だろう（応）
宜	★★	よろしく〜べし	〜するのがよい・〜したほうがよい
須	★★	すべからく〜べし	ぜひ〜すべきだ・〜する必要がある
猶・由	★★	なほ〜（の／が）ごとし	ちょうど〜のようだ（再読＝比況の助動詞「ごとし」へ返る）
盍	★	なんぞ〜（せ）ざる	どうして〜しないのか＝〜すればよいのに（勧誘・反語）

💡 「未・将且・当応・宜・須・猶由・盍」の7つだけ覚えれば再読文字はOK。語呂は「み しょうしょ とうおう ぎ す ゆうゆ こう（未／将且／当応／宜／須／猶由／盍）」。

💡 2回目の読みは決まっている＝「ず・んとす・べし・べし・べし・ごとし・ざる」。1回目（まさに・よろしく等）とセットで丸暗記。

▶ 例文：未(いまだ)嘗(かつて)有(あら)也 → いまだかつて有らざるなり（まだ一度もなかった）。※「ず」は再読文字「未」が担う

▶ 例文：人当(まさに)勉(つと)学(むべ) → 人はまさに学に勉むべし（人は当然学問に努めるべきだ）。※「当」は「まさに〜べし」と2回読む

2 置き字 — 書いてあるが読まない字

読みはつけませんが、文の中で役割（意味）は持っているのが置き字です。「読まない＝意味がない」ではない点に注意。

字	頻出	位置	はたらき（読まないが意味は残る）
▼ 文中で関係を示す置き字			
於・于・乎	★★★	名詞の前	場所・時（〜に・〜で）／比較（〜より）／受身（〜に〜られる）／対象（〜を・〜に）の目印
而	★★★	用言（動詞・形容詞）の間	順接（〜て・そして）／逆接（〜のに・しかし）をつなぐ。前後の意味で順接か逆接かを判断
▼ 文末・句末の置き字			
矣	★★	文末	断定・完了・強調の語気（「〜た・〜なのだ」のニュアンス）。読まない
焉	★★	文末	断定・強調の語気。※文中・文頭で「いづくんぞ」と読む場合は置き字ではない
也	★★	文末（時に文中）	文末では断定「〜なり」と読むのが原則（読まずに置き字とする例は限られる）。文中の「也」は提示・主語の切れ目を示し読まないことが多い

💡 置き字の代表は「於・于・乎／而／矣・焉」。語呂「お う こ・じ・い えん」。読まないが、訳には意味（場所・比較・受身・順接逆接・断定）を必ず反映させる。

💡 「也」は注意：文末の「也」は多くは「〜なり」と読む断定の語。すべてが置き字ではない。「於・而・矣・焉」と同じ感覚で必ず消さないこと。

💡 「於」が出たら直後の名詞をチェック → 比較（〜より）か受身（〜に…られる）か場所（〜に・で）かを必ず見分けるのが入試の急所。

▶ 例文（比較）：青、之を藍より取りて、藍よりも青し（出典：荀子・勧学／青取之於藍、而青於藍）→「於」は「〜より」の目印。読まない

▶ 例文（受身）：労力者治於人 → 労力する者は人に治められる。「於」が受身を示す（読まない）

▶ 例文（而）：学而時習之 → 学びて時に之を習ふ（「而」は順接、読まない）／人不知而不慍 → 人知らずして慍みず（「而」は逆接寄り）

3 返読文字 — 下から返って読む字

下の語を先に読み、その後この字に返って読む字。レ点・一二点がつく目印になります。否定・受身・使役・比況・可能などの助動詞的な意味を担います。

分類	字	頻出	読みと意味
▼ 否定（最重要）			
否定	不・弗	★★★	〜ず（〜しない）
否定	無・莫・勿	★★★	〜なし（存在しない）／勿・莫は「〜（する）なかれ」（禁止）
否定	非	★★★	〜にあらず（〜ではない＝体言の否定）
▼ 存在・可能・受身			
存在	有	★★★	〜あり（〜がある・いる）
可能・許可	可	★★★	〜べし（〜できる・してよい）／可〜乎・豈可〜は反語
受身	見・被	★★★	〜（せ）らる（〜される）
▼ 使役・起点・比況・難易			
使役	使・令	★★★	〜をして〜（せ）しむ（〜に〜させる）。遣・教も同類
起点	自・従	★★	〜より（〜から）
並列・比較	与	★★	〜と（〜と一緒に）／A与B＝AとB
比況	如・若	★★	〜のごとし（〜のようだ）／如A＝Aのようだ。「不如・不若」＝〜に及ばない
受身の枠	為	★★	〜たり・〜なす・〜のために／為A所B＝AにBされる（受身）
受身の枠	所	★★	〜（する）ところ／所B＝Bするもの・こと。「為A所B」で受身（AにBされる）
難易	難・易	★	〜（し）がたし・〜（し）やすし
多少	多・少	★	〜おほし・〜すくなし

💡 返読文字は「下を読んでから上に返る」字。否定（不・無・非）、受身（見・被）、使役（使・令）、比況（如・若）の4グループだけは即答できるようにする。

💡 「尽（ことごとく）」は副詞で上から読む語（返読文字ではない）。④の頻出訓読語で覚える。

▶ 例文（使役）：使(しむ)民(たみ)戦 → 民をして戦はしむ（民に戦わせる）。「使」は下から返って「しむ」と読む

▶ 例文（受身）：為(る)人(ひと)所(ところ)笑 → 人の笑ふ所と為る（人に笑われる）。「為A所B」で受身

4 頻出訓読語 — 読み方が決まっている重要語

形は同じでも読み（送り仮名）で意味が変わる語。読み分けが入試で問われます。

語	頻出	読み	意味・訳し方
所以	★★★	ゆゑん	理由・わけ（〜する理由）。文脈により「手段・方法」を表すこともある
可以	★★★	もつて〜べし	〜することができる・〜してよい
与に	★★	ともに	一緒に・〜と共に
相	★★★	あひ	互いに／（動作が一方に及ぶ）〜してくる・〜してさしあげる
毎に	★★	ごとに	〜のたびに・いつも
自ら	★★★	みづから／おのづから	みづから＝自分で／おのづから＝自然と（読み分け頻出）。「自」は「〜より（から）」と読む別用法もある
悉く	★★	ことごとく	すべて・残らず（＝尽く・皆）
徒に	★★	いたづらに	むだに・むなしく
蓋し	★★	けだし	思うに・たぶん・おそらく
夫れ	★★	それ	そもそも・いったい（文頭で話を起こす語）
嘗て	★★	かつて	以前・かつて（過去の経験）。「未嘗」＝いまだかつて〜ず
安くんぞ	★★★	いづくんぞ	どうして〜か（多く反語。焉・悪・寧も同読）
已	★★	やむ／すでに／のみ	已む＝終わる・やめる／已に＝すでに／〜のみ（限定）。読み分け注意
能く	★★★	よく	〜できる（能力・可能）。「不能」＝〜できない

💡 「自ら」は2つの読み — みづから（＝自分で／意志）とおのづから（＝自然と／ひとりでに）。文意で判断する超頻出ポイント。

💡 「安くんぞ・いづくんぞ」が出たら、ほぼ反語「どうして〜か、いや〜ない」。疑問か反語かは文末（〜や／〜ん）で見分ける。

▶ 例文：所以(ゆゑん)遣将守関者 → 将を遣はして関を守らしむる所以は…（〜する理由は）

▶ 例文：燕雀安(いづくんぞ)知鴻鵠之志哉 → 燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや（小鳥にどうして大鳥の志がわかろうか、いや、わからない＝反語）

5 見分け方の総まとめ — 「読まない字」と「返る字」

💡 読まない字（置き字）の見分け：「於・于・乎／而／矣・焉」がその位置に来たら原則読まない。送り仮名がつかず、レ点・一二点の対象にもならないのが目印。

- 而＝用言（動詞・形容詞）の間にあれば置き字（読まない）
- 於・于＝名詞の前にあればほぼ置き字。意味（場所・比較・受身）は訳に反映
- 矣・焉＝文末にあれば多く置き字。ただし也は文末でも「なり」と読むのが原則

💡 返る字（返読文字）の見分け：不・無・非・有・可・見・被・使・令・自・従・与・如・若・為・所・難・易・多・少は、下の語を読んでから上に返って読む。返り点（レ点・一二点）が必ずつく。

- 否定（不・無・非）＝必ず下から返って「ず・なし・あらず」
- 受身（見・被）／使役（使・令）＝下の動詞を読んでから返る
- 同じ字でも読む場合あり：焉は文中・文頭で「いづくんぞ」と読む／也は文末で「なり」と読むのが原則。位置と文意で判断

💡 3種の合言葉：「再読＝2回読む（未・将且…）」「置き字＝読まないが意味あり（於・而・矣焉）」「返読＝下から返る（不・使・如…）」。この3つを見分けられれば白文が読める。